

九州医療科学大学 中期目標・中期計画 【第3期】

九州医療科学大学（大学院：社会福祉学研究科・保健医療学研究科・医療薬学研究科）

ビジョン (教育目標)	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	各研究科別計画・対策
教育力(使命・目的等を含む)	1) 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	◆3つのポリシーを明確に示し、それらを踏まえた学修成果の可視化を図り、大学院生が自らの学びを振り返り展望することができる体制を構築する。 ◆時代のニーズに対応したカリキュラムおよび指導体制の検討・検証を引き続き行う。
研究力	1) 大学の強みや特色を活かした研究力の強化 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	◆各研究室や教員個々の研究力向上を図り、国内外の学術論文発表数を増やす対策を講じる。
募集力(ブランド力)	1) ブランド形成と募集力(ブランド力)の強化 ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	◆定員充足を目指し、とくに社会人を対象にした広報活動に取り組む。 ◆各研究室や教員個々の研究・指導内容に関する情報発信を行う。
地域活性化	1) 地域活性化の為に拠点創生 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	◆大学院と医療・福祉現場との連携強化を図っていく。
2025年度の総評 (今年度の取組) 【定性評価スコア】 5. 達成している 4. かなり進んでいる 3. 普通 2. やや足りない 1. ほとんど進んでいない	教育力(使命・目的等を含む)	・社会福祉学研究科では、学習のしおりに教育方針として明示した3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化を図る機会として、夏・冬期スクーリング時に大学院生および研究科教員全員参加による研究テーマ・計画・中間・成果発表会を継続して実施した。また、指導体制の充実を図る取り組みでは、新たな指導教員は加わらなかったが、先に加えた教員を希望する受験生が継続して出ている。本年度は1名が博士の学位を取得した。 【定性評価スコア4】 ・保健医療学研究科では、多様な専門性を有する学生の研究指導として、新たにピアサポートとピアレビューの仕組みを構築した。また、カリキュラム（博士前期課程）分野名の改定を行った。さらに、3つのポリシーを基盤にアセスメント・ポリシーを制定し、研究科レベル、専攻レベル、科目レベルにおける学修評価システムを構築した。その結果、大学院生の研究内容の質が大きく向上した。 【定性評価スコア5】 ・医療薬学研究科では、大学院生の指導体制の確認を教授会や研究進捗報告会で従前通り実施した。講義は、前年度と同様のカリキュラムで従前通り実施した。3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化を図る目的で、大学院生が自らの学びをユニバ上で記録して自ら振り返って展望できる体制を維持した。また大学院生がこのような学びを自ら展開しやすいよう、大学院生のスケジュールに即した指導体制を維持した。 【定性評価スコア5】

研究力	・社会福祉学研究科では、査読付き国内5報（前年5）、紀要等2報（前年1）、報告書7報（前年3）であった。【定性評価スコア3】 ・保健医療学研究科では、査読付き採択論文数は国内は1報、国際は10報であった。また、紀要等は1報、著書等は2報であった。前年度と比較して研究力の向上が認められた。【定性評価スコア3】 ・医療薬学研究科では、各大学院教員の研究の進展度を、薬学科と連携して引き続きリトリートにおいて可視化した。リトリート等を通じて、研究にもしっかりと取り組んでいくマインドが徐々に醸成されつつあるように見受けられた。また薬学科と連携して各講座の研究力向上を図る目的で、前年度と同様に講座費が措置された。今年度、国内の査読付き学術論文発表数が増加に転じた。前年度に発表がなかった講座からの発表があったことや本学の査読付きジャーナルが投稿先として活用された事例があったことも、今年度も望ましいことであった。研究が進んだ好ましい事例としては、今年度、優れた業績により3年で学位取得に至った大学院生（指導教員：徳永教授）が誕生するという初の快挙があった。また今年度は、優れた技術を開発した宮崎県内の団体や個人を表彰する「第25回野口賞 奨励賞」を本大学院の甲斐教授が受賞した。これらの出来事は、本大学院の研究ムードを高めるニュースとなった。査読付き採択論文数（2025年度中に集計された2024年度分）は、国際13報、国内10報、紀要等1報、総説・著書等14報（前年度は国際11報、国内2報、紀要等4報、総説・著書等14報）であった。【定性評価スコア3】
募集力(ブランド力)	・社会福祉学研究科では、通信教育部のスクーリングを活用した広報活動を継続して実施した。通信教育部から博士（前期）課程への進学も促し、次年度入学の入試において、前年度の卒業生1名の受験があった。博士（前期）課程から博士（後期）課程への進学も促し、前年度の修了生1名の受験があった。博士（前期）課程では2名、博士（後期）課程では3名の受験があった。【定性評価スコア3】 ・保健医療学研究科では、博士課程前期の入学者数（生命医科学部からの進学を含む）が増加し、入学定員数を満たした。また、博士後期課程1名、博士前期課程2名が本年度学位を取得した。本年度は博士後期課程2名の受験があった。【定性評価スコア4】 ・医療薬学研究科では、社会人を対象とした広報活動を地域の薬剤師会や学会を通じて実施した。今年度の入学者は1名であった。また今年度入試では2名の学部学生による大学院受験があった。注目を集める大学院教員の講座での本格的な研究に参画した経験が進学意欲を湧かせたようであり、前年に続いて望ましいことであった。【定性評価スコア3】
地域活性化	・社会福祉学研究科では、QOL研究機構社会福祉学研究所を活用した取り組みを継続して行い、社会福祉学部と連携して実施したイベント3件を活動報告書としてまとめ、公表した。【定性評価スコア4】 ・保健医療学研究科では、在籍する大学院生は勤務先で責任ある職位に就いており、本研究科と勤務先との連携体制が整っている。また、博士前期課程の2名（TA）は、地域活性化の一環として、検診と健康教育の啓発活動を積極的に行っている。宮崎大学医学部附属病院との共同研究は現在も進行中である。【定性評価スコア3】 ・医療薬学研究科では、現時点で在籍する大学院生は勤務先の医療現場において責任ある地位に就いており、大学院生を通じて大学院と医療現場は連携できる体制となっている。地域の活性化に資するアウトリーチとして、薬学科と連携して開催された「宮崎県北サイエンスフォーラム」において、5名の大学院教員が研究内容をPRした。地域の薬剤師も参加しやすいよう開催時期を3月から12月に変更したが、今年度は学外参加者は集まらなかった。研究に興味を持った本学学生の参加は十数名程度あった。学外からも参加してもらえるよう、今後も開催日程や方式を検討する。その他には「第25回野口賞 奨励賞」を受賞した甲斐教授の受賞記念と研究成果のアウトリーチを目的としてQOL研究機構主催の特別講演会を3月に開催した。地域連携に関する顕著な取り組みとしては、今年度、生薬学、薬用植物学、漢方医薬学を専門として主に薬用作物の栽培について研究する本大学院の渥美准教授が栽培講師となり、延岡市と本学が共に進める延岡ひなたサフランの高品質化、産地化に関する連携事業での指導的立場での尽力があった。【定性評価スコア3】

2026年度への展望 (来年度の計画案)	教育力(使命・目的等を含む)	・社会福祉学研究科では、3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化を図る取り組みを継続して実施する。また、指導体制の充実を図る取り組みについても継続する。 ・保健医療学研究科では、ピアサポートとピアレビューの体制を継続し、アセスメント・ポリシーを基盤に、大学院生の研究内容の質の向上に務める。また、修了時アンケート調査を行うとともに、その結果を分析し、教育の質を高めていく。さらに、レポート課題においては生成AIの活用を積極的に導入する。 ・医療薬学研究科では、次年度も指導体制を点検する。大学院生の満足度が高い教育力を維持していく。
	研究力	・社会福祉学研究科では、地域における中核的な研究拠点として、本学の研究経費助成・地域創生事業経費助成やQOL研究機構社会福祉学研究所の研究助成等も活用して、積極的な研究活動を促す。また、大学院生との共同研究も積極的に進めていく。 ・保健医療学研究科では、大学院担当教員の研究環境を整備する。また、博士後期課程の研究内容は、本学の査読付きジャーナル（JHWI）などに英文で投稿できるよう、研究コミュニティの形成と共同研究を積極的に推進し、国際的研究力を向上させる。 ・医療薬学研究科では、各大学院教員が研究論文発表数を増やせるよう、今年度の支援体制を継続する。研究分野により1報の論文完成までの平均的な所用期間は異なるものの、各大学院教員が年1報程度は論文発表できることを目指す。最近数年間論文発表ができていない大学院教員には、引き続き、投稿先の選択肢として本学の査読付きジャーナルも奨める。
	募集力(ブランド力)	・社会福祉学研究科では、通信教育部のスクーリングを活用した広報活動を継続する。また、博士（前期）課程から博士（後期）課程への進学も促す。 ・保健医療学研究科では、修了生が集う場（研究コミュニティ）を設け、研究意欲のある人材を確保すべく人材ネットワークの有効活用を積極的に試みる。3つのポリシー、特に、アドミッション・ポリシー（AP）の改善とアップデートを行い、募集力の向上を目指す。デジタルサイネージ（DS）を利用した各教員の研究成果を学内外にアピールするとともに、インサイドアウト法によるブランディングを推進する。 ・医療薬学研究科では、定員充足に向けて特に社会人が大学院に求めるニーズに応じていく必要がある。地域の病院/薬局に在籍の本学卒業生などを中心に学位取得のメリットをPRすることを継続するとともに、地域薬剤師等の医療人が集まる学術集会等の機会を活用してPRしていく。
	地域活性化	・社会福祉学研究科では、社会福祉学部と連携して、QOL研究機構社会福祉学研究所を活用した地域活性化の取り組みを継続する。 ・保健医療学研究科では、地元の医療施設との共同研究により、さらなる地域の医療技術向上を図る。みやざきテクノフェア、ものづくり交流展などのイベントに参加し、本研究科の研究成果や知的財産を地域に還元する。さらに、産学連携の一環として、新たな製品や商品の開発を行い、地域の活性化に繋げていく。 ・医療薬学研究科では、今年度の活動を継続するとともに、地域における存在感を高められるよう、HP、宮崎県北サイエンスフォーラム、各種学術集会等での発信を続けていく。また、延岡市、宮崎大学、地域薬剤師会等との交流を通じて地域の医療・福祉現場のニーズをとらえ、地域貢献できるように努めていく。